

日本地質学会 *News*
Vol.25 No.8 August 2022



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2022年6月11日から2024年総会

会長（代表理事） 岡田 誠（茨城大学）

副会長 杉田律子（科学警察研）
星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 中澤 努（産業技術総合研究所）
副常務理事 緒方信一（中央開発（株））
執行理事 内尾優子（国立科学博）
内野隆之（産業技術総合研究所）
尾上哲治（九州大学）
加藤猛士（川崎地質（株））
狩野彰宏（東京大学）
亀高正男（（株）ダイヤコンサルタント）
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
松田達生（工学気象研究所）
矢部 淳（国立科学博）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研）

理 事 青矢陸月（徳島大学）
芦 寿一郎（東京大学）
天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）
磯崎行雄（東京大学）
大友幸子（山形大学）
大橋聖和（山口大学）

笠間友博（箱根町立箱根ジオミュージアム）
神谷奈々（同志社大学）
亀田 純（北海道大学）
川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
北村有迅（鹿児島大学）
清川昌一（九州大学）
黒柳あずみ（東北大学学術資源研究公開センター）
桑野太輔（千葉大学）
小松原純子（産業技術総合研究所）
斎藤 眞（産業技術総合研究所）
佐々木和彦（佐々木技術士事務所）
沢田 健（北海道大学）
下岡和也（愛媛大学）
菅沼悠介（国立極地研究所）
高野 修（石油資源開発（株））
西 弘嗣（福井県立大学恐竜研究所）
野田 篤（産業技術総合研究所）
細矢卓志（中央開発（株））
保柳康一（信州大学）
堀 利栄（愛媛大学）
松田博貴（熊本大学）
三田村宗樹（大阪公立大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山路 敦（京都大学）
山本啓司（鹿児島大学）

監 事

任期：2020年5月23日から2024年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.25 No.8 August 2022

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

案内……2

第6回QST国際シンポジウム「NanoTerasuが拓く科学技術イノベーション」

公募……2

京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻教授公募/新潟大学教育研究院人文社会科学系教員公募(理科教育学担当)/伊豆大島ジオパーク門員の募集/北海道大学大学院理学研究院地球惑星科学部門地球惑星システム科学分野教授公募

各賞助成……3

2022年度日本化学会吉野彰研究助成募集/国際科学技術共同研究推進事業(戦略的国際共同研究プログラム)新たな国際頭脳循環モード促進プログラム 課題の募集/2023年度笹川科学研究助成募集/日本アイソトープ協会奨励賞募集

紹介……4

極限大地 ウィリアム・グラスリー著・小坂恵理訳(佐野弘好)/フィールドマニュアル:図説堆積構造の世界 日本堆積学会監修・伊藤 慎総編集(保柳康一)

表紙紹介……5

第13回惑星地球フォトコンテスト:日本地質学会会長賞「ミニチュアアテラス」(金子敦志)

CALENDAR……6

博物館で地学を学ぼう!(8)……7

群馬県立自然史博物館(高桑祐司)

地質学雑誌:新しい論文が公開されています……9

学会記事……11

2021年度第5回理事会議事録

2022年度第1回理事会議事録

2021年度第11回執行理事会議事録

2021年度第12回執行理事会議事録

印刷・製本:日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

第6回QST国際シンポジウム 「NanoTerasuが拓く 科学技術イノベーション」

QSTでは、完成が間近に迫る次世代放射光施設「NanoTerasu」を国内外に向けて広くアピールするとともに、イノベーション創出に向けた利用研究について広く意見・情報交換を行うことで、多様な研究分野におけるユーザーの開拓・拡幅と革新的成果の早期創出に繋げることを目的に、下記の通り第6回QST国際シンポジウムを開催いたします。

開催日時：令和4年11月14日（月）～11月15日（火）（2日間）

会場：イイノホール（〒100-0011 東京都千代田区幸町2-1-1）（オンライン併用）

参加費：無料

使用言語：英語

主催：量子科学技術研究開発機構

共催：光科学イノベーションセンター、東北大学

後援：宮城県、仙台市、東北経済連合会、文部科学省、日本放射光学会

プログラム及び参加登録方法：

以下のウェブページから確認・登録をお願いします。

<https://www.qst.go.jp/site/3gev/intl-symposium2022jp.html>

お問い合わせ先：

第6回QST国際シンポジウム実行委員会

qst-kokusai-symposium@qst.go.jp

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



京都大学大学院工学研究科 社会基盤工学専攻教授公募

職務内容：大学院、学部とも次の専門分野に関連する教育および研究

【専門分野】計測評価分野のミッションは、地殻にある鉱物・エネルギー資源の可採量を増進し、環境に調和した高効率の採掘技術の開発、既開発資源をさらに有効に開発・活用する技術、二酸化炭素の地中貯留や高レベル

放射性廃棄物の地層処分など、資源工学に関連した計測評価、非破壊試験の研究である。応募者は、石油・天然ガス・地熱などのエネルギー資源開発や地下の高度利用などに必要な、地殻の物性・ダイナミクス・流体挙動などの計測・評価やシミュレーションに関する研究業績を有し、資源工学の学術的発展に寄与する計測評価工学、油層開発工学、応用地質学などの分野を専門とすることが望ましい。

【その他】社会基盤工学専攻資源工学講座（応用地球物理学分野、地殻開発工学分野）および都市社会工学専攻地球資源学講座（地殻環境工学分野、地球資源システム分野）と協力し、社会基盤工学専攻計測評価工学分野の教育・研究および運営にかかわる業務を行う。同分に配属された学生の卒業論文、修士論文および博士論文の研究を指導するとともに、社会基盤工学専攻および工学部地球工学科資源工学コースの上述の専門分野に関連する授業科目を担当する。

資格等：博士の学位を有すること。当該分野に関する優れた業績を有し、熱意をもって、これらの研究教育に取り組める方。なお国籍は問わないが、日本語での会話および文書による意思の疎通に支障のないこと。また英語による講義の担当が可能なこと。

任期：なし

雇用期間（着任時期）：令和5年4月1日（または、それ以降できるだけ早い時期）

応募締切 令和4年9月15日（木）必着

問合せ先担当：福山英一

E-mail：fukuyama.eiichi.3x@kyoto-u.ac.jp

応募方法・応募書類等詳しくは、https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/2022-07/220915_1600-19f3a16a2a61c03907332f86aa7a6324.pdf

新潟大学教育研究院 人文社会科学系教員公募 （理科教育学担当）

所属：人文社会科学系 教育学系列
担当学部・研究科：教育学部・自然科学研究科

担当分野：理科教育（理科教育学）

担当科目：

教育学部：専門科目（理科教育法（初等）、理科教育法（中等）Ⅰ～Ⅳの内2科目、生活科教育法、生活、自然科学基礎演習Ⅰ・Ⅱ、情報理科特論、情報理科特講、教職実践演習、卒業研究）など

自然科学研究科*：課題探索特講Ⅰ・Ⅱなど

教育実践学研究科：授業改善と学習評価 B（数理系）Ⅰ・Ⅱ

採用職名・人員 准教授または講師（常勤、任期の定めなし）1名

応募資格：

(1)修士の学位を有する方。博士の学位を有す

る方が望ましい。

(2)理科教育学を専門分野とする研究において十分な研究遂行能力を有し、優れた研究業績があり、教育実践の経験を有する方が望ましい。

(3)生活科関連科目（生活科教育法および生活）を担当できる方

(4)教育学部での教員養成および教員研修に意欲を持って取り組んでいただける方。大学での教育経験を有する方が望ましい。

(5)大学院での教育を行うことのできる方

(6)教員免許（小学校教諭あるいは中学校・高等学校教諭（理科））を有する方

(7)附属学校園における授業指導および共同研究に積極的に取り組める方

(8)採用後に新潟市内またはその近郊に居住できる方

採用予定年月日：令和5年4月1日

応募締切日時：令和4年10月7日（金）16:00 必着

問い合わせ先：

新潟大学人文社会科学系総務課教育学部総務係

E Mail：soumu@ed.niigata-u.ac.jp

TEL：025（262）7105

※問い合わせは原則として電子メールでお願いします。

応募書類、書類提出先等詳細は、

https://www.niigata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2022/08/ed20221007koubo_sci.pdf

伊豆大島ジオパーク門員の募集

伊豆大島火山博物館を観光客にも、地域の方にも親しまれ愛される伊豆大島ジオパークの拠点施設として再整備するため、令和6年リニューアルオープンを目指し、主担当となる大島町任期付職員を募集します。

募集人員：ジオパーク専門員（大島町任期付職員）1名※地域おこし協力隊制度を活用

募集期限：2022年10月14日（金）まで ※申込のあった方から順次選考し、採用の可否を決定するため、採用が決定した時点で受付を中止とします。申込前に必ずお問合せください。

任期：2022.12.1～2023.3.31（採用日から3年間を限度に任期を更新する場合あり）

選考方法：第1次 書類選考、第2次 個別面接
<https://town.oshima.tokyo.jp/soshiki/soumu/saiyo20220808.html>

問合せ先：東京都大島町役場総務課

TEL:04992-2-1443

FAX:04992-2-1371

北海道大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門 地球惑星システム科学分野 教授公募

募集人員：教授 1名

所属：大学院理学研究院 地球惑星科学部門
地球惑星システム科学分野

専門分野：古生物学（地質調査や化石の解析を基本とした地球生命史、層序学、地球環境変遷などを研究する分野）

職務内容：（1）高い見識と指導力を持って本分野の2G（下記）をまとめ、教育・研究を先導する（2）全学教育（初年次教育）および地球惑星システム科学関連の学部・大学院教育を担当する（3）本分野の教員と協力し、大学運営に責任をもって取り組む

応募資格：（1）博士号を取得していること（2）当該分野で国際的に優れた研究業績を有し、独創的な研究を強力に推し進めていただけの方（3）学生の教育に熱意を持って取り組んでいただけの方（4）地質・野外調査に精通している方（5）大学運営に積極的に協力して下さる方

採用時期：2023年4月1日以降のできるだけ早い時期

任期：常勤（任期なし）

提出期限：2022年10月31日（月）必着

提出先・問合せ先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学大学院理学研究院地球惑星システム科学分野

栗谷 豪

電話：011-706-2729 (dial in) FAX：011-706-2729

電子メール：kuritani@sci.hokudai.ac.jp

詳しくは、https://www.sci.hokudai.ac.jp/grp/pv/pv/hokudai_sys_prof_app_j.pdf

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

2022年度 日本化学会吉野彰研究助成募集

2022年度助成対象研究テーマ：「玄武岩と炭酸ガスとの反応機構に関する基礎的研究」
助成金額、件数および研究助成期間：助成金額は200万円／件、件数は毎年最大1件、研究助成期間は原則として助成金交付日から2年間です。

受付期間：2022年8月1日（月）～9月30日（金）
対象者：年齢、個人／グループ、所属機関（産学）は問わないが、応募時点で本会の個人会員である者。※応募時に入会可。
応募方法：申請書を募集ページ（WEB）からダウンロードの上、必要事項を記入し、日本化学会事務局宛に電子メールでご提出下さい。

募集ページ：<https://www.chemistry.or.jp/news/information/-2022-2.html>

お問合せ先：公益社団法人 日本化学会 企画部 吉野彰研究助成 係

〒101-8307 東京都千代田区神田駿河台1-5

E-mail y-josei@chemistry.or.jp

電話 080-7397-9719

国際科学技術共同研究推進事業 （戦略的国際共同研究プログラム） 新たな国際頭脳循環モード 促進プログラム 課題の募集

募集趣旨：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）は、日本の科学技術の発展を将来にわたり国際的にリードしていく研究者の育成に資するため、若手研究者の科学技術先進国への渡航・研究を支援します。

募集領域：デジタルサイエンス、AI、量子技術に関連する先端分野

募集期間：2022年7月29日（金）～10月11日（火）12：00（日本時間）

支援期間：14ヶ月

支援規模：1課題あたり総額400万円を上限とします。（間接経費30%を含む）

採択予定数：10課題程度

詳細URL：https://www.jst.go.jp/inter/program/announce/announce_renewmap.html

問合せ先：国立研究開発法人科学技術振興機構 国際部 事業実施グループ

E-mail：renewmap@jst.go.jp TEL：03-5214-7375

2023年度 笹川科学研究助成募集

■主な募集条件

【学術研究部門】

- ・大学院生等（修士課程・博士課程）
- ・35歳以下の任期付き雇用の若手研究者
- ・ただし、「海に関係する研究」は重点テーマとして支援し、雇用形態は問わない。
- ・助成額は、1件150万円を限度とする

【実践研究部門】

- ・学校・NPO職員等に所属している方
- ・博物館、図書館等の生涯学習施設に所属

している学芸員・司書等

・年齢、雇用形態は問わない。

・助成額は、1件50万円を限度とする

申請期間：2022年 9月15日（木）～2022年10月17日（月）23：59 まで

申請方法：Webからの申請となります。詳細は本会Webサイトをご確認下さい。

<https://www.jss.or.jp/ikusei/sasakawa/>

<問い合わせ先>

公益財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

TEL：03-6229-5365

URL：<https://www.jss.or.jp>

E-mail：josei@jss.or.jp

日本アイソトープ 協会奨励賞募集

放射性同位体及び放射線に係わる基礎並びに応用研究において、独創的かつ顕著な成果を挙げ、将来の利用拡大・発展への寄与・社会貢献等が期待される若手・中堅の研究者個人を顕彰しています。自薦・他薦を問わず、広く候補者を募集しますので、可能でしたら、ぜひ会員様等お近くの方へご案内いただけますよう、よろしく申し上げます。

なお、下記応募資格を満たせば、再応募も可能です。

応募分野：放射性同位体及び放射線に係わる基礎並びに応用研究を対象とする。なお、放射性同位体及び放射線の管理、啓発、普及活動、社会活動についても考慮する。

締切：2022年10月31日（月）

応募資格など詳細及び応募書類は協会ホームページにてご確認ください。

応募要綱 <https://www.jrias.or.jp/report/cat1/309.html>

ポスター https://www.jrias.or.jp/pdf/incentive_award_poster2023.pdf

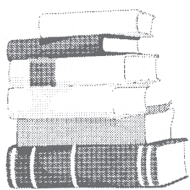
本件に関するお問合せ先：

日本アイソトープ協会学術課

日本アイソトープ協会奨励賞事務局

電話：03-5395-8081

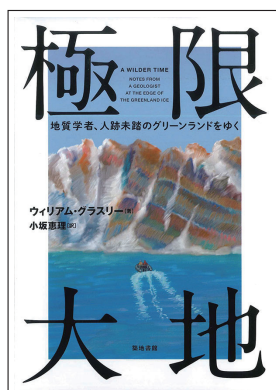
メール：shoreisho-r@jrias.or.jp



紹介

極限大地

ウィリアム・グラスリー著
小坂恵理訳



築地書館刊2022年7月発行、
四六判240ページ、定価：本体2400円＋税、
ISBN：978-4-8067：1637-2

本書は、地質調査をグリーンランドで5度に行わって行った著者が体験した極北の原風景を描き、調査の動機、目的、調査中に直面したさまざまな困難などを述べた一般向け普及書である。著者、ウィリアム・グラスリー博士はカリフォルニア大学デービス校の地質研究者であり、デンマーク、オーフス大学地球科学研究所の客員研究員でもある。デンマーク人地質研究者、カイ・ソーレンセン（専門は構造地質学）とジョン・コーストガール（専門は鉱物学、地球化学）が共同研究者として野外調査に同行している。彼らは先行研究に対する疑問の解決のためにグリーンランド野外調査を決意した。

調査地はデンマークの自治領で、大部分が万年雪と氷床に覆われた極北の巨大な島（小さな大陸というべきか）、グリーンランドの南西海岸である。この地域は38億年前のアミツォク片麻岩、また37億年前のストロマトライト様の構造の発見で知られており、初期地殻と初期生命の進化を解く上で最も熱いフィールドの1つである。このような研究に触発されて、グリーンランドの地質に関心を抱いている本会会員も少なくないと思われる。しかしグリーンランドの大自然での地質調査は思った以上に厳しいことを深く認識しておく必要

がある。

3つの章からなる本書の中で、3人の研究者のグリーンランド遠征の背景、動機がまず第1章で語られている。彼らを動かしたのは、地球化学的手法によって太古代の大陸が合体したことを意味する縫合帯の存在をグリーンランド南部、ナストキディアン構造帯に推定した論文であった。ただし、それは地球化学・同位体地質学的な推論でしかなく、縫合帯を示す構造や岩石が野外で現認されたわけではなかった。ナストキディアン構造帯には数列の顕著な剪断帯が東北東－西南西方向に分布しているが、著者らは先行研究や著者らの事前研究から、調査対象を最北部のノードレストレム・フィヨルド剪断帯付近に絞った。

1ヶ月に及ぶテント生活を続けながら行われた地質調査によって、かつて海洋底が存在したことを物語る枕状溶岩とかんらん岩、海洋底の地下深部への沈み込みを示す斜方輝石岩などの超高压型変成岩、強い剪断を受けた“鉛筆片麻岩”が発見され、著者らはノードレストレム・フィヨルド剪断帯が単なる剪断帯ではなく、大陸どうしが衝突した痕跡、すなわち海洋地殻の断片を含む縫合帯であると確信した。その後の試料の分析、年代測定結果もあわせて、この剪断帯の北縁を約18億9000万年前の大陸－大陸衝突イベントを記録した衝突帯であると確認し、著者らはこの成果を数編の論文にまとめている（例えばGlassley et al. 2007, 2014）。

地質に関する記述のほかに、本書には現実離れし、神秘的でさえあるグリーンランドの壮大な自然が随所に描写されている。なによりもフィヨルドの絶壁、氷床、そして冷たく青い海、融氷水が流れる氷上河川の景観の描写は読む者を圧倒する。わずかに地衣類、コケなどが生えているツンドラが広がる極北の大地の風景を想像できるだろうか。そのほか蜃気楼やフィヨルドで発生した強い渦潮などの自然現象や著者らのキャンプ生活の様子も紹介されている。

さて、グリーンランドは人跡未踏の極限環境の大地、“ウィルダネス”（荒野）であり、そのような場所で人は大自然と一体化し、都会の喧噪から解放され、荒野は一種のふるさととして受け入れられるべきだと著者は主張している。また荒野はかつていたるところに存在していたが、地球上に人類があふれるようになった現在では荒野を経験できる場所はごく限られてしまったと嘆いている。グリーンランドは数少なくなった荒野の1つであるという言葉は5回のグリーンランド遠征を行ってきた著者が発した重いひと言であろう。グリーンランドのような“荒野”での現地調査、地質研究を志す人びとには本書の一読を薦める。

最後に本書の惜しまれるもあけておこう。本書には挿図が少なく、本文中の記述、とくに地名の理解がしばしば難しい。また一般普及書とはいえ、重要な文献の出典が示されていない点はグリーンランド西部の地質に関心

をもった読者にはやや不親切ではないだろうか。

文献

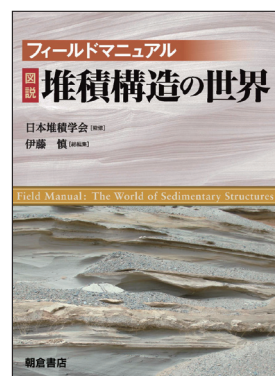
Glassley, W. E., Korstgård, John A. and Sørensen, Kai, 2007. Two tectonically significant enclaves in the Nordre Strømfjord shear zone at Ataneq, central West Greenland. Geol. Surv. Denmark and Greenland Bull., 13, 49-52.

Glassley, W. E., Korstgård, John A., Sørensen, Kai and Platou, S. W., 2014. A new UHP metamorphic complex in the ~1.8 Ga Nagssugtoqidian Orogen of West Greenland. Amer. Mineral., 99, 1315-1334.

（佐野弘好）

フィールドマニュアル 図説堆積構造の世界

日本堆積学会監修、
伊藤 慎総編集



朝倉書店、2022年7月1日発行、
B5判、210ページ、
ISBN：978-4-254-16279-0

日本堆積学会の堆積学研究者46人による執筆で、編集委員会を日本堆積学会で立ち上げ、伊藤 慎先生が全体の監修をおこなっている。さらに、執筆だけでなく日本堆積学会会員から広く募集された国内外の堆積構造の写真がふんだんに使われている。本書は堆積構造の基礎、碎屑性堆積物の堆積構造、生物（化学）源堆積物の堆積構造、火山碎屑物の堆積構造、生痕化石、堆積相解析の6つの章から構成されている。全ての写真はカラーで、図もほとんどがカラーで分かりやすい。多くの図や写真は適切な大きさを確保しているが、ごく一部に小さめの図・写真があるが、1ページが割り当てられている項目に図・写真を多用した場合には仕方のないことだろう。

第1章「堆積構造の基礎」は、一方向流、振

動流など流れの水理学的基本性質の説明、堆積物の粒度、形状などの基本性質、粒子移動の基本、ベッドフォームなど次の第2章以降の基本となる部分が詳しく述べられている。第1章に関しては、マニュアルというよりも教科書的な構成ではあるが、堆積学の基本的用語を調べる上で、引きやすいように章の下に「流れと侵食作用」、「ベッドフォーム」の2節を置き、その下には、一方向流や振動流などのキーになる用語が入った項目がページの頭に大きな活字で示されている。この工夫によって、知りたい項目に容易にアクセス出来るようになっており、マニュアルとして使えるように構成されている。この章の内容は地質学の初学者にはやや高度であるが、専門の学部生から大学院生、研究者、技術者には重要な点がまとめられているので便利である。また、初学者や専門外の人には2章以降を利用して、フィールドで堆積構造に馴染んだ後に、理論を学ぶためにこの章を利用することも出来るだろう。

第2章「碎屑性堆積物の堆積構造」はこの本の中で最もページが割かれている章で、項目が堆積構造ごとに立てられており、「インプリケーションとオリエンテーション」や「トラフ型斜交層理・葉理」などの項目が1ないし2ページで写真や図を多用して説明されている。「津波で形成された堆積構造」と「洪水で形成された堆積構造」という項目も立てられており、フィールドでこれらの堆積物を見出すのに役に立つと思われる。このように、フィールドで見つけた堆積構造の名前を確認したり、その成因との関係で堆積構造を確認したりすることが出来るように、マニュアル的使い方

を意識して各項目が構成されている。フィールドで見出される碎屑性堆積物の堆積構造の特徴はほぼ全て網羅されている。

第3章「生物（化学）源堆積物の堆積構造」は、堆積物の性格上仕方が無いが多くの項目が堆積構造にはなっていない。ただ、この項目の中心となる石灰岩などからなる地層は、日本では馴染みの薄い点もあるので、地形や分類といった項目は、マニュアルとしては適切であろう。鮮明で分かりやすい写真が多用され、初心者にも親切的な構成になっている。

第4章「火山碎屑物の堆積構造」は最初の節に分類と用語という基本事項が4ページで説明されており、他の章とは異なった構成になっているが、この後の項目に出てくる用語の説明にもなっており、砂などの碎屑岩と異なった分類がなされている火山碎屑岩には必要な節だろう。その後、降下堆積物、火砕密度流堆積物、岩屑なだれ堆積物などが項目として立てられており、火山碎屑岩に特有な堆積物が写真とともに紹介されている。

第5章「生痕化石」は最初の節で堆積環境と生痕化石の説明をして、環境指標としての生痕化石の特徴や分類がなされている。その後、項目として堆積環境や岩相に関連した生痕化石や生痕相を紹介している。写真も明瞭で分かりやすくフィールドで見つけた生痕やその写真をこの本の写真と照合して生痕相や環境を調べるというような使い方も出来るのである。

第6章「堆積相解析」は、1から5章が項目毎に執筆分担がなされていたのに対して、伊藤慎先生による執筆となっている。この章はページ毎に項目を割り当てる方式は取られてい

ないが、最初の「堆積相解析の基礎」の節では、その中の各項目が「堆積相解析とは」「堆積相」・・・「ワルターの法則」・・・などになっており、辞書的に調べたい項目にたどり着けるようにも工夫されている。2節以降は河川堆積相、海岸堆積相、など堆積環境毎に堆積作用や堆積相の積み重なりと堆積システムの特徴などが順に項目としてあげられており、カラーの図と写真をふんだんに配置して、分かりやすく説明されている。どうしても図や写真が小さくなってしまうが、図の配色の工夫や鮮明な写真が選ばれており、理解を助ける上で問題とはならないと思う。

B5版で210ページの本書は、調査カバンに入れて持ち出すには若干大きいと感じるが、巡検などで車に積んで持って行って観察ポイントで参照することや宿での復習や同行者との議論など、この本が謳うようにフィールドマニュアルとして活躍するだろう。また、分かりやすい多くの図と写真から、調査前の予習や手元に置いて様々な堆積構造を眺め、その解説を読んでおくことによって、様々な堆積構造に触れてその重要性を普段から認識することで、調査時に見出される堆積構造の種類が増えて、調査の質も高くなると思われる。また、美しい堆積構造は、フィールドへの誘いにもなるので、是非、本書を手元に置いて、次のフィールド調査への準備を進め、そして本書を手にして精度の高いフィールド調査を目指してほしい。

(保柳康一)

表紙紹介

第13回惑星地球フォトコンテスト：日本地質学会会長賞 「ミニチュアテラス」

写真：正会員 金子敦志（福島県）

撮影場所：山形県西置賜郡飯豊町 広河原温泉

撮影者より：山形県西置賜郡飯豊町には広河原温泉があり、間欠泉があります。間欠泉付近にはそこから溢れた温泉水の成分が沈殿して形成されたと思われる、まるで棚田のような石灰華段丘があります。鍾乳洞で見たことのある石灰華段丘と比べて、とても小さく、よく見るとたくさんの丸みを帯びた構造物が段丘の中にあり、不思議な景色に心が惹かれました。

審査委員長講評：この作品は山形県の広河原温泉の小規模な石灰華テラスを撮影したものです。ローアングルで手前から奥まで見渡せるように撮影しています。一面が褐色のモノトーンで、テラス以外に余分なものが入っていません。探査車「オポチュニティ」は火星表面で発見した「ブルーベリー」を連想させる小球まであり、まるで火星表面にいるような気分になります。（審査委員長 白尾元理）

CALENDAR

2022.8～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

2022年

8月 August

(後) 科学教育研究協議会第68回全国研究大会(岡山大会)

8月10日(水)～12日(金)

会場 岡山理科大学 岡山キャンパス

<https://kakyokyo.org/>

第76回地学団体研究会総会(長野)

8月20日(土)～20日(日)

開催方式: 現地開催とオンラインのハイブリッド方式

会場: 信州大学教育学部(長野県長野市)

<https://www.chidanken.jp/>

(後) 第9回国際地学教育会議

8月21日(日)～25日(木)

場所: くにびきメッセ(鳥根県コンベンションセンター)

<https://ja.geoscied9.org/>

9月 September

★日本地質学会第129年学術大会(2022東京・早稲田大会)

口頭(対面) 9月4日(日)～6日(火)

ポスター(オンライン): 9月10日(土)～11日(日)

会場: 早稲田大学 早稲田キャンパス(東京都新宿区西早稲田)

※関連行事「地質情報展2022とうきょう」は同会場で9/3-9/5開催です。

(共) 2022年度日本地球化学会第69回年会

9月5日(月)～12日(月)

場所: 高知大学朝倉キャンパス会場+オンラ

イン会場(ハイブリッド開催)

<http://www.geochem.jp/meeting/>

(後) 第65回粘土科学討論会

9月7日(水)～8日(木)

(討論会の実施、現地見学会は開催しません)

会場: 島根大学

http://www.cssj2.org/event/annual_meeting/

日本鉱物科学会2022年年会・総会

9月17日(土)～19日(月)

会場: 新潟大学

<http://jams.la.coocan.jp>

第39回歴史地震研究会(高槻大会)

9月17日(土)～19日(月)

場所: 関西大学高槻ミュージアムキャンパス

<http://www.histeq.jp/kenkyukai.html>

国際 Gondwana 研究連合(IAGR)

2022年総会及び第19回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

9月23日～25日(シンポジウム)

9月26日～27日(峨眉山巨大火山区野外巡検)

場所: 中国四川省成都工科大学

<https://www.data-box.jp/pdir/4aa617ecc00845c284f085edba48ec5>

10月 October

日本火山学会2022年度・秋季大会

10月12日(水)～19日(水)

会場: 三島市民文化会館・三島市民生涯学習センター(ハイブリッド方式)

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html>

2022年度 第2回地質調査研修

10月24日(月)～28日(金)

主催: 産総研コンソーシアム「地質人材育成コンソーシアム」

場所: 鳥根県出雲市長尾鼻周辺(小伊津海岸)

定員: 6名(定員になり次第締切), CPD: 42単位

<https://www.gs.jp/geoschool/geotraining/2022-2.html>

11月 November

第35回ヒマラヤ・カラコルム・チベット ワークショップ(HKT-35)

11月2日(水)～4日(金)

場所: ネパール・ボカラ

www.gondwanainst.org/symposium/2022/HKT2022/Interimnotice-HKT-20220518.docx

問い合わせ:

Prof. A.P. Gajurel, apgajurel@fulbrightmail.org

Dr. L.B. Adhikari, lbadhikari@hotmail.com

第6回QST国際シンポジウム

「NanoTerasaが拓く科学技術イノベーション」

11月14日(月)～15日(火)

会場: イイノホール(東京都千代田区内幸町)(オンライン併用)

<https://www.qst.go.jp/site/3gev/intl-symposium2022jp.html>

12月 December

(協) 第38回ゼオライト研究発表会

12月1日(木)～2日(金)

場所: あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)

講演申込締切: 9月9日(金)

<https://jza-online.org/>

地質学史懇話会

12月17日(土) 13:30-16:30

場所: 早稲田奉仕園(東京メトロ東西線早稲田駅下車徒歩5分)

山田俊弘・須貝俊彦「望月勝海日記通読プロジェクト」(仮題)

今村遼平「中国地図測量史」

問い合わせ: 矢島道子 pxi02070@nifty.com

注意: 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、行事中止の可能性もあります。実際の行事開催の有無については事前に各主催者、問い合わせ先にご確認ください。



博物館で地学を学ぼう！(8)
群馬県立自然史博物館

写真1 群馬県立自然史博物館の外観

info

群馬県立自然史博物館

〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1

<http://www.gmnh.pref.gunma.jp/>

0274-60-1200

※現在、ご来館の際にはオンライン事前予約をお願いしています。

群馬県其自然史研究ステーションをめざして

地学研究係長（学芸員） 高桑祐司

富岡市と群馬県立自然史博物館

世界文化遺産である富岡製糸場がある群馬県富岡市。1996（平成8）年10月、ここに群馬県立自然史博物館（写真1）が開館しました。開館26年目となる当館は、市北部の丘陵の上に整備された「もみじ平総合公園」の中にあります。この公園には当館のほか富岡市立美術館や市立の運動施設などがありますが、かつてこの周辺が、丘陵の基盤をなす富岡層群と安中層群に含まれるベントナイトの採掘場だったことはあまり知られていません。

また、群馬県立自然史博物館は、かつて市内にあった県立自然科学資料館の後継施設に位置付けられていますが、この資料館も実はそれ以前にあった群馬県立博物館の後継施設の一つになります。こうしたこれまでの経緯を見てみると、当館が富岡市に今存在することは、群馬県立の博物館として由緒正しいような気がしてなりません。

ところで、地質学会は2016年に「県の石」を選定しましたが、「群馬県の石」のうち化石として選ばれたのは富岡市で見つかったヤベオオツノジカ（写真2）でした。この化石は江戸時代に発掘されたもので、化石と共に当時の発掘記録や江戸幕府の侍医の「鑑定書」なども現存しています。この「鑑定書」では、「枯骨（骨化石のこと）」は巨大な「麋（大型のシカ類）」に由来したものだが、その正体は後世の科学者が明らかにするだろうと言った内容の記述があり、後にそれは現実（Tsugawa and Shikama, 1962; Matsumoto, 1963）となりました。化石の発掘地は自然史博物館と同じ上黒岩の地内で、館の北東約800mの丘の中腹には当時建てられた記念碑が今も立っています。



写真2 上黒岩産のヤベオオツノジカ化石（一部）

常設展示

群馬県立自然史博物館の常設展示は、1階の「地球の時代」「群馬の自然と環境」、そして2階の「ダーウィンの部屋（博物学者の部屋）」「自然界におけるヒト」「かけがえのない地球」の合計5コーナーで構成されています。「群馬の自然と環境」にあるブナ林等のジオラマでは、実際に伐採した樹幹を処理して用いるなど、できるだけ実物を展示に取り入れるようにしてあります。

5つのコーナーの中で、地質学と古生物学に関する内容が中核をなしているのが「地球の時代」（写真3）です。このコーナーは太陽系（地球）の誕生から新生代第四紀までを、地質年代で分けた5つのエリアで構成しています。古生代以降の展示エリアでは各時代の群馬も併せて紹介し、古生代と中生代では足尾帯、上越帯、秩父帯等と関係する岩石や化石を、そして新生代では県内各地の火成岩や富岡・安中層群などの海成層や陸化後に形成された湖成層等を展示しています。

「地球の時代」の展示の目玉は、中生代のカマラサウルス（写真5）など3大陸の竜脚類恐竜の全身骨格ですが、他にも古生代の単弓類ディメトロドン（写真4）の全身骨格、トリケラトプスの発掘現場を再現した「ボーンベッド」（写真4）、日本で初めて見つかったスピノサウルス類の歯、ヒレヤクジラヒゲまで保存されている新生代新第三紀のナガスクジラ類の全身骨格、皮膚の模様まで残った兎岩層産カエル化石（ペルー産）、新生代第四紀のオオツノジカ類なども見応えがあります。

一方、群馬県には5つの活火山（うち3つは常時観測火山）があり、関東有数の火山県だといえます。そのため、新生代第四紀の展示の一部には開館当初から火山全般に関する展



写真3 常設展示1階「地球の時代」

示がありましたが、この展示を県内産鉱物に関する展示と併せて近年リニューアルすることができました（写真6）。

また、常設展示の他コーナーにも地学関係の展示があります。「群馬の自然と環境」の尾瀬の展示ではその成り立ちを紹介するために、尾瀬ヶ原の泥炭の剥ぎ取り標本や周辺の岩石などが展示されています。また、県内にある火山の展示では、各火山の代表的な岩石が展示されています。

2階の「自然界におけるヒト」では、私たちヒトのからだに見られる様々な特徴やヒト科の進化について、化石や骨格のレプリカを中心に海外のアーティストと博物館展示の国内専門業者の連携によるジオラマや壁画が展示されています。そして「かけがえのない地球」には、剥ぎ取り標本を用いた森林の土壌が持つ保水能力に関する展示があります。

企画展

当館の企画展は、開館記念展「アルゼンチンの大恐竜展」を皮切りに、自然史に関する様々な事象のほか、常設展示での扱いが十分でない分野や内容などもテーマとして、複数回を毎年度開催しています。最近では、群馬の大地の風景に焦点を当てた「ぐんまの景観がこんなにも素晴らしい5つの理由」、最新の人類進化研究を紹介した「人類進化700万年」、翼竜類など「とぶ」古生物を紹介した「空にいたんだ勇者たち」などを開催しました。

そして今は、第66回企画展として「宇宙への挑戦」を開催しています。この企画展は9月11日までを「season I 月に向かって」と銘打ち、初期の宇宙開発や人類を初めて月面に立たせたアポロ計画、そして近年の月探査やその成果に基づいた今後の月面開発計画などについて展示しています。展示の目玉は、旧ソ連のルナ16・20・24号がサンプリングした「月の砂」とアポロ15号が地球に持ち帰った「月の石」、それにアポロ17号の飛行

士が実際に着た船内作業服です。また当館ならではのものとして、富岡市内に事業所がある国内有数の宇宙関連企業・IHIエアロスペースにご協力いただき、かつて同社が開発した月・惑星移動探査機「ローバ」と月探査機「ベネトレータ」を特別にお借りしています。

そして9月17日からは「season II 月よりも遠くへ」が始まります（写真7）。この展示では、月よりも遠



写真4 トリケラトプスの産状展示

くに存在する惑星など様々な天体の探査や観測、そして人類の宇宙進出等を紹介しします。

「season II」の展示の目玉は、富山県に落下した白萩隕石とこの隕石から榎本武揚が作らせた「流星刀」です。流星刀は会期中必ず一振りをご覧いただけますが、10月22・23日の二日間は現存が確認されている二振りを同時に展示します。また、国際宇宙ステーション（ISS）に食糧として運ばれた富岡甘栗地区産のキウイフルーツ（協力：JA甘栗富岡）や当館所蔵の隕石コレクションも展示します。

教育普及

他の博物館と同じく、コロナ禍は、当館のほとんどの教育普及活動に影響しました。当館では夏休みに展示室で一泊する大人気イベント「博物館探検隊」のように未再開のものはありますが、参加人数を絞りつつもすでに多くのイベントが再開されています。

再開したイベントのうち、館内実施のものには、「サイエンス・サタデー」、「ホリデー・サイエンス」、「大人のホリデー・サイエンス」などワークショップ系のもの、「ビデオ上映会」、「自然史講座」、そして館に設置されている40cm反射望遠鏡などを使った「天体観望会」があります。展示解説員が実施する「常設展示の展示解説」は、コロナ禍の状況を鑑みつつ、部分的な再開となっています。ワークショップ系のイベントでは化石のレプリカ作りなど地学系の内容だと申込みが多く、人気も高いです。これらの他に年間を通じた活動で、より深く自然科学に接するものとして「ミュージアムスクール（小5～中3対象）」や「高校生学芸員」も実施しています。

館外実施イベントでは、その一つが年に数回開催する「ファミリー自然観察会（写真8）」で、こちらも鉱物や化石をテーマにした内容だと申込みも多く、根強い人気があるようです。ただし今のところ参加人数を絞らざ

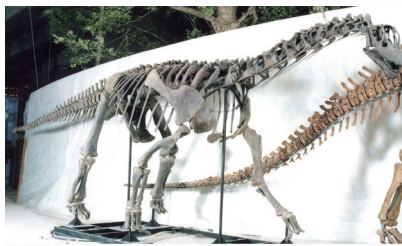


写真5 カマラサウルスの実物全身骨格

るを得ないのが頭の痛いところです。他には年に2～3回の実施で、県内限定にはなるのですが、「移動博物館」も学校や公民館で開催しています（写真9）。

一方、企画展の開催時には、企画展関連イベントとして、「講演会」や「ワークショップ」なども開催します。「ワークショップ」は、実験的な内容から観察的な内容まで企画展ごとに違いがあり、館外での実施もあります。また、展示解説員による「企画展の展示解説」は、今のところQRコードを用いたスマホで聴く展示解説として実施中です。

これらのイベントの開催情報や申込み方法のほとんどは、各年度の半期ごとに作成・配布しているイベントガイドや博物館Webpageで見ることができます。その他にも各種SNS（Facebook, Instagram, Twitter）を通じて館行事やその他の様々な博物館活動、収蔵標本等に関する情報を発信しています。館で制作した動画は、群馬県庁の公式YouTubeチャンネル「tsulunus」を通じて配信しています。また、県庁が所管する「出前なんでも講座」に一部の職員が登録していて、そちらからの講演依頼もあります。

一方、学校教育との関係では来館した学校団体のための「館内授業」や当館職員が学校に出向いて実施する「出前授業」をはじめ、大学生等の学芸員資格取得のための博物館実習への対応なども行っています。また、夏休みには「教員のための博物館の日」も開催しています。

おわりに

群馬県の玄関口とも言える高崎までは、新幹線で東京から1時間弱。通勤圏だと言えます。しかし、その群馬県にある自然はとても豊かで、平野から山岳まで生物や地学など自然史研究の面から見ても興味深いフィールドです。もしフィールドワークで群馬県に来れる際には、見学がてら、群馬県立自然史博



写真8 ファミリー自然観察会「化石さがしに挑戦しよう」



写真6 リニューアルされた火山と鉱物の展示

物館にもぜひお立ち寄りいただければと思います。

今年、当館は開館26年目を迎えました。そうした中で研究活動に関しては、職員独自の研究と共に、他の研究機関との共同研究も着実に進められ、昨年12月のジュラ紀のワニ類の祖先の化石や今年3月の新属新種の飛ばないハクチョウ類の化石については、その成果をメディアを通じて一般の方にお伝えし、さらに館では特別展示を実施して、一般の皆様にも実物標本をご覧いただきました。

現在、社会から博物館に求められる事柄は、開館当初と比べて多様化し、かつ増している状況で、当館もそれらのことを考えながら館を運営せざるを得ない状況です。しかし、そんな中でも群馬県の豊かな自然を知るための窓口、そして群馬県における自然史研究のステーションとなるべく、今後も博物館活動を続けていきたいと思っています。



写真7 企画展「宇宙への挑戦season II～月よりも遠くへ～」のビジュアル



写真9 移動博物館（於みなかみ町）

地質学雑誌

地質学雑誌は、2022年（128巻）からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

巡検案内書

ジオパーク秩父のジオ多様性

高木秀雄, 吉田健一

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0010>

ジオパーク秩父は1市4町（秩父市、横瀬町、皆野町、長瀬町、小鹿野町）をエリアとしており、2011年に国内で15番目の日本ジオパークに認定された。ジオパークのメインテーマは「大地の守人を育むジオ学習の聖地」であり、東京から比較的近いこともあり明治時代より多くの研究者がこの地を訪れて、近代地質学を発展させた地学の歴史が盛り込まれているとともに、宮沢賢治の足跡を辿ることもできる。また、秩父札所 34ヶ所観音霊場などに代表される寺社には、人々が特異な地形に神秘を感じ、大切に守り伝えてきた特別な場所が数多くあり、ジオパーク秩父の見どころともなっている。公開されているジオサイトも札所の数と同じ 34ヶ所に絞られており、そのほか文化・歴史サイト、生態サイト、眺望サイトが選定されている。この巡検では、関東を代表する三波川帯、秩父帯（メランジュ）、および中新統秩父盆地層群の代表的なジオサイトを見学するとともに、盆地に広がる中新統と、それを取り巻く山々を構成する基盤岩の地形、および両者の境界をなす不整合と断層を、札所と和銅遺跡で見学する。ジオと文化・歴史のつながりを感じることができるコースでもある。



巡検案内書

関東山地東縁部の御荷鉾緑色岩類と北部秩父帯 柏木ユニットの海洋性岩石およびクリッペ説の 検証

原 英俊, 富永紘平

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0016>

御荷鉾緑色岩類は、後期ジュラ紀に形成され、前期白亜紀にアジア大陸東縁へ付加された地質体だと考えられている。一方、御荷鉾緑色岩類と北部秩父帯の柏木ユニットは、岩相、変形構造、地質構造、変成作用において、密接な関係があることが指摘されている。両地質体の初生的な関係の理解は、後期ジュラ紀～前期白亜紀のパンサラッサ海（古太平洋）やアジア大陸東縁の沈み込み帯のテクトニクスの解明につながるため重要である。本巡検では、御荷鉾緑色岩類と柏木ユニットの海洋性岩石である玄武岩類およびチャートに着目し、両地質体の類似点と相違点について観察を行う。また本巡検地では、御荷鉾緑色岩類の上位に柏木ユニットが衝上する大高取山クリッペや堂山クリッペが提唱されている。これらクリッペについて、両地質体の岩相上の特徴から再検討を行う。さらに小規模に点在して分布する帰属不明な蛇紋岩についても観察を行う。



論説

秋田県湯沢市蓮台寺のカオリン鉱物に富む礫質堆積物の産状と起源

鹿野和彦, 石山大三, 大場 司, 藤本幸雄, 大口健志

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0017>

秋田県湯沢市蓮台寺の採石場に露出する厚さ10mを超える帰属不明の礫層（蓮台寺礫層）についてその産状を記載し、起源について議論した。この礫層は、構成粒子の大きさや種類（色調）などの違いによって、15枚を超える多数の、層状に重なる礫質堆積物からなる。いずれも、カオリン鉱物に富む礫を主体とし、ラハール堆積物の特徴を示す。湯沢地域に分布するほかの地質単位との層位関係は、この礫層が2Ma以降に堆積したことを示唆する。また、古流向はこれが南東から来たことを示唆し、礫を構成する鉱物が熱水変質起源であることから、その給源は、湯沢市街地南東の三途川カルデラ内において熱水変質起源のカオリン鉱物が記載されている地域に求めることができる。蓮台寺礫層を構成する多数のカオリン鉱物に富む礫質堆積物は、その給源において斜面崩壊もしくは水蒸気噴火で変質岩の岩屑が繰り返し生じて流出する時期があったことを示唆する。



レター

画像解析と数値シミュレーションによる鉄コンクリーションのサイズ分布と空間分布の起源の解明

城野信一, 田村美紗樹

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0015>

Spherical iron-oxide concretions are found in the Jurassic Navajo Sandstone in Utah, USA. Based on image analysis of more than a thousand concretions, we found that: (1) the spatial distribution resembles a random distribution, with deviation from the random distribution occurring as concretion clusters; (2) the spacing between concretions is much larger than the concretion sizes; (3) the width of the size distribution increases with increasing concretion size; and (4) the volume fraction of concretions is constant, irrespective of size. These characteristics can be explained by repeating cycles of CaCO_3 dissolution and precipitation, the precursor material of Fe-oxide concretions. In numerical simulations, the width of the size distribution did not depend on the input parameters, including pH and supersaturation.



レター

沖縄一宮古海台に発達する上部新生界の石灰質ナノ化石層序

佐藤時幸, 渡邊奈々, 山本和幸, 井龍康文

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0018>

The upper Miocene to Pleistocene Shimajiri Group, composed mainly of siltstone and sandstone, occurs on some of the Ryukyu Islands in southwestern Japan. This group is thought to have been deposited in a shelf-slope to fore-arc basin setting before the accumulation of Pleistocene coral reef deposits (Ryukyu Group). We investigated the calcareous nannofossil biostratigraphy of the Shimajiri Group in the Offshore Okinawa 1-x well, drilled near the northeastern margin of the Okinawa-Miyako Submarine Plateau, Ryukyu Islands. A sample from 280 m, at the



base of Ryukyu Group, contains *Gephyrocapsa parrallela*, which first occurred at 0.987 Ma. *Discoaster quinqueramus* and *D. berggrenii*, which define both the top and bottom of the calcareous nannofossil zone NN11, are found throughout the Shimajiri Group, consistent with a late Miocene age between 8.10 Ma and 5.53 Ma. A large sedimentary gap between the Shimajiri and Ryukyu groups suggests that part of the Okinawa-Miyako Submarine Plateau may have been above sea level during the early Pliocene, implying deposition of the Shimajiri Group here was completed earlier than in other regions. This study provides key constraints on the Cenozoic geological history and phylogeography of the Ryukyu Islands.

レター

根田茂帯付加体中に挟在する石英閃緑岩岩塊の
前期オルドビス紀ジルコン年代

内野隆之

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0019>

The Nedamo Belt in the Kitakami Massif, NE Japan, contains early Carboniferous and Early Triassic accretionary complexes. Tectonic blocks containing plutonic rocks, ultramafic rocks and high-P/T schists occur in these complexes and characterize the Nedamo Belt. The plutonic rocks comprise hornblende gabbro and quartz diorite, and they have been identified at more than 50 localities. U-Pb dating of zircon from the quartz diorite using inductively coupled plasma-mass spectrometry yields an Early Ordovician age of ca. 480 Ma. Based on similarities in lithofacies and age, the plutonic rocks are correlative to the Kagura Igneous Rocks of one of the basement units in the South Kitakami Belt. This correlation may help in deducing the mechanism (e.g., large sinistral strike-slip fault) of emplacement of the tectonic blocks into the accretionary complexes of the Nedamo Belt.



～卒業記念やイベントなどのグッズにも最適！ 好評発売中～



名入れサービス承ります

ご好評いただいております、学会オリジナルフィールドノートは、名入れサービスも承ります（有料）。ビニールコーティングの表紙は、水や摩擦・衝撃にも強く野外調査に最適です。ぜひご活用ください。

サイズ：12×19cm.

中：レインガード紙使用、2mm 方眼.

カバー：ハードカバー、ビニールコーティング、
金箔押し.

色：ラセットブラウン（小豆色）

定価 **600** 円（会員頒価 500 円）

学会オリジナルフィールドノート

ご注文・お問い合わせは、学会事務局まで

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156 e-mail: main@geosociety.jp

学 会 記 事

一般社団法人日本地質学会 2021年度第5回理事会議事録

日 時：2022年4月9日（土）14:00-18:10

【WEB会議形式】

出席者：出席理事43名，出席監事2名

・会長1名：磯崎行雄

・副会長2名：佐々木和彦・平田大二

・常務理事1名：中澤 努

・副常務理事1名：岡田 誠

・執行理事12名：ウォリス サイモン・大藤

茂・緒方信一・狩野彰宏・亀高正男・小宮

剛・坂口有人・高嶋礼詩・辻森 樹・星

博幸・松田達生・矢部 淳

・理事会議長1名：山口飛鳥

・理事会議副議長1名：納谷友規

・理事24名（議長・副議長を除く）：芦 寿

一郎・天野一男・安藤寿男・内野隆之・尾

上哲治・笠間友博・亀田 純・川端清司・

後藤和久・小松原純子・齋藤 眞・杉田律

子・竹下 徹・内藤一樹・西 弘嗣・根本

直樹・野田 篤・藤井正博・細矢卓志・保

柳康一・松田博貴・三田村宗樹・道林克

禎・矢島道子

・オブザーバー 1名：堀 利栄

・監事2名：岩部良子・山本正司

・事務局1名：澤木寿子

欠席者：欠席理事6名

・理事：上松（渡邊）佐知子・亀尾浩司・北

村有迅・清川昌一・奈良正和・早坂康隆

*成立要件：理事総数49名の過半数25名 本

日の出席者43名で本理事会は成立。

*議決：出席者の過半数22名

*開催にあたって、小松原理事および尾上理

事を書記に指名した。

*開会にあたり、磯崎会長より挨拶があっ

た。

*前回議事録確認を行った。

報告事項

1. 執行理事会全体報告（中澤常務理事）

中澤常務理事より2021年度第7回～第11回執行理事会の報告が行われた。主な点は以下の通り。地質学雑誌110巻1号以降のJ-STAGE公開PDFの保護解除及び差替作業が完了/日本語版国際年代層序表最新版(2021年10月版)に更新/「日本列島地質総覧」(加藤碩一ほか編集・執筆，朝倉書店発行)の編集協力依頼取り下げ/キャリアビジョン誌2021年版発行/2021年度地質系若手人材動向調査を実施中。地球科学系の大学教員の会員対象に回答を依頼中/地質情報展2022あいち(地質学会共催，2/19-20開催，来場者424名)の開催報告/JABEEオンラインシンポジウム「昔と違う イマドキのフィールド教育」(3/6)開催報告/JABEE地球・資源分野：新体制の発足。地質学会から委員として5名推薦/第13回防災学術連携シンポジウム(5/9開

催予定，テーマ：「自然災害を取り巻く環境はどう変化してきたか」)。応用地質学会と地質学会の共同での発表を予定/国際基礎科学年(IYBSSD)への協力について/新設賞の英語名称を定めた。

2. 委員会報告

1) 総務委員会（緒方理事，亀高理事）

緒方理事より，会員動静について説明が行われた。2022年3月末時点での会員数は合計3207名(昨年比-77名)。減少程度については，昨年度を除く過去5年間と同程度。前回理事会以降の逝去者5名に対して黙祷が捧げられた。また亀高理事より，会員システムのクラウド化に関する進捗状況が報告された。

2) 専門部会連絡委員会（辻森理事）

2021年度各専門部会の年次報告について説明が行われた。

3) 国際交流委員会（ウォリス理事）

2024年韓国釜山で開催予定のIGC37巡検への協力体制について状況説明が行われた。日本海表記の問題と竹島巡検の問題については話し合いを継続中。1stサーキュラー発表の予定から考えて，2022年夏頃までには決着をつけたい。またロシアとウクライナ問題に関して，EGU，JpGU等の対応が報告された。磯崎会長からはロシア学長連合の声明について，西理事からはIUGSの対応について，それぞれ情報共有があった。

4) 地質学雑誌編集委員会（大藤理事）

地質学雑誌の編集状況について説明が行われた。投稿数は昨年と比べてやや増加傾向。また128巻(2022年1月)より予定通り地質学雑誌の完全電子化がスタートしている旨が報告された。

5) アイランドアーク編集委員会（狩野理事）

IARの出版状況，編集状況等について説明が行われた。投稿数は例年に比べるとやや少なめ。2021年のインパクトファクターは増加の見込み。

6) 地学教育委員会（高嶋理事）

令和4年度の大学入学共通テストの地学関連科目の問題は，毎年課題とされてきた他の教科目に対する平均点の低さも是正されたため，今後も同様の努力を続けていただくよう，大学入試センターへ意見書を提出したとの報告が行われた。

7) 生涯教育委員会（矢部理事）

日本地質学会 News 誌にて，2022年1月より「博物館で地学を学ぼう!」のシリーズ連載が開始された。また一般講演会，見学会，展示など，学会が主催，共催等する地質の日関連行事について説明が行われた。

8) ジオパーク支援委員会（天野理事）

JGASUより世界ジオパーク国内推薦申請書に関わるレビュー推薦依頼があり，2名を推薦した。またIUGSでは「ジオヘリテイジ」の選定が進んでいることが紹介された。

9) 地学オリンピック支援委員会（高嶋理事）

第14回日本地学オリンピックの開催報告があり，1582名の受験者から，4名が国際地学オリンピックの代表に選出された。選抜問題

への意見書が地学オリンピック支援委員会において現在検討中。

10) 選挙管理委員会（中澤常務理事）

2022年度代議員選挙，会長・副会長候補意向調査，理事選挙の結果報告があった。

審議事項

1. 名誉会員候補者の選出（佐々木副会長）

3名の候補者について総会に諮ることが承認された。

2. 各賞受賞者の決定（西理事）

各賞選考委員会西委員長より，受賞候補者の選考結果について報告がなされ，審議の結果，

以下の各賞について受賞者が決定した。

・功績賞（1件）高橋正樹会員

・H.E.ナウマン賞（1件）片山郁夫会員

・小澤儀明賞（1件）石輪健樹会員

・棚山雅則賞（2件）岡崎啓史会員・宇野正起会員

・Island Arc Award（1件）磯崎行雄会員

・論文賞（1件）高嶋礼詩会員

・奨励賞（2件）中西 諒会員，加藤悠爾会員

・学会表彰（1件）伊予原新氏

(学会賞，国際賞，小藤文次郎賞，地質学雑誌特別賞は該当者なし)。

本年度は新しい賞の創設を行ったため，委員の中で賞の定義や推薦の範囲の認識に混乱がみられた。そのため，西委員長より各賞選考に関するワーキンググループを作って問題点と解決方法を検討する必要性が提案された。特に，1) 各賞の定義と推薦者の範囲を明確にすること，2) 各推薦者にそれらを通知・徹底してもらう手段をどうするか，3) 選考時に投票を行う場合の方法，の3点についての検討が必要。理事会を中心としたワーキンググループを立ち上げ，検討を進める方針が確認された。

3. 地質環境の長期安定性研究委員会の解散及び法地質学研究委員会の設立（辻森理事）

地質環境の長期安定性研究委員会より，運営に関する負担解消のため，発展的解散の申し出があり承認された。今後は環境地質部会をはじめ研究テーマに関連する専門部会に参加し，活発な議論を継続していく。また法地質学の学術的研究の推進と普及を目的とした法地質学研究委員会（委員長 川村紀子）の設立提案があった。設立趣旨などの説明があり，承認された。

4. 地質学雑誌投稿編集出版規則の改正（大藤理事）

地質学雑誌電子版投稿編集出版規則の改訂案について承認された。プレプリントサーバーに掲載済みの原稿は，編集委員会で受け付けの可否を決定する。訳本を引用せざる得ない場合は，原典の先取権と情報のトレーサビリティ明確化のために，原典と訳本両方の出版年を明記する。

5. 2022年東京・早稲田大会のセッション変更と開催形式（星理事）

早稲田大会のセッション変更（地質学会 News 誌1月号記事参照）について事後承認された。また早稲田大会実行委員会提案のシンポジウム1件については承認されたが、執行理事会提案の2件については、早急に執行理事会で検討を進め、理事会でメール審議する。

大会の開催方法（口頭発表対面、ポスター発表e-poster、懇親会実施しない、表彰・顕彰式は現地実施）と巡検実施に向けてのルール・参加者への依頼事項について説明が行われ、承認された。ただし感染状況によっては完全オンライン開催など今後も変更がありうる。また、講演、巡検のキャンセルポリシー、講演取り消しの取り扱いについては引き続き詳細を検討する。

6. 学会活動におけるダイバーシティ&インクルージョン意識的啓発+キャリア支援事業の提案（ジェンダー・ダイバーシティ委員会堀委員長）

学会内でのダイバーシティ推進のため、2022年度以降の学術大会について、学術大会セッションへの EDI（Equality, Diversity and Inclusion）ロゴマーク付与（世話人申告制）と、地質分野新規参入「若手」研究者支援のための ECS（Early Career Scientists）ロゴマーク付与（自己申告制）が提案され、承認された。

7. 学会活性化に関わる会費等の変更と関連規則（定款、運営規則）の変更（佐々木副会長）

学会HP会員ページで2月15日に提案された「学会活性化に関わる会費などの変更についてのご提案」についてあらためて説明があり、承認された。なお定款および運営規則変更の承認については総会議案となる。

8. 表彰制度の見直しと関連規則（運営規則、各賞選考規則、各賞選考委員会規則）の変更（磯崎会長、中澤常務理事）

表彰制度見直し（2021年度第4回理事会承認済）に伴う運営規則および各賞選考規則、各賞選考委員会規則の変更について承認された。

9. 研究奨励金支給規則案（中澤常務理事）

野外地質学に関する若手育成事業のひとつである研究奨励金制度発足について、支給規則案が示された。支給対象、支給方法、会計報告などについて意見があがった。規則の細かな点については継続審議とする。

10. 2021年度事業実施概要（磯崎会長）

2021年度事業についての実績概要について説明がなされ、承認された。

11. 2022年度事業計画（磯崎会長）

2022年度の事業計画骨子案について説明がなされ、承認された。

12. 2021年度決算概算（緒方理事）

2021年度決算について説明がなされ、承認された。オンライン学術大会および普及事業関係（ショートコース受講料、キャリアビジョン誌掲載料）の増収により、収入全体は前年度よりやや増加し、最終的には黒字となっ

た。

13. 2022年度予算案（緒方理事）

2021年度予算案について説明がなされ、決算概算案、本予算案とともに承認された。

14. 総会議案の決定（中澤常務理事）

6/11（土）の総会議案について提案がなされ、承認された。

監事報告

1. 岩部監事より以下のコメントがあった。

早稲田大会の開催方法について状況に応じた柔軟な対応が出来るよう、引き続き検討をお願いしたい。また、業務の電子化・効率化については、支部・専門部会活動や選挙業務においては検討余地があるのではないかと。

2. 山本監事より以下のコメントがあった。

韓国IGC37における巡検への協力については、このままの状態であれば、残念ではあるが地質学会としては協力できないのではないかと、日韓の政治問題に関わることはできるだけ避けるようにしてほしい。

以上

以上、この議事録が正確であることを証するため、議長及び出席監事・理事は次に記名・捺印する。

2022年4月28日

理事：議長 山口飛鳥

理事：副議長 納谷友規

代表理事：会長 磯崎行雄

理事：副会長 佐々木和彦

理事：副会長 平田大二

監事：岩部良子

監事：山本正司

理事：出席理事名（省略）

一般社団法人日本地質学会 2022年度第1回理事会議事録

日時：2022年6月11日（土）16：00～17：20

【WEB会議形式】

出席役員 理事（43名）：青矢睦月・芦 寿一郎・天野一男・磯崎行雄・保坂（内尾）優子・内野隆之・大友幸子・緒方信一・岡田 誠・尾上哲治・笠間友博・加藤猛士・狩野彰宏・神谷奈々・亀田純・亀高正男・本郷（川村）紀子・平出（黒柳）あずみ・桑野太輔・小松原純子・小宮 剛・斎藤 真・坂口有人・佐々木和彦・沢田 健・菅沼悠介・杉田律子・高嶋礼詩・中澤 努・西 弘嗣・野田篤・星 博幸・細久卓志・保柳康一・榊原（堀）利栄・松田達生・松田博貴・三田村宗樹・矢島道子・矢部 淳・山口飛鳥・山路 敦・山本啓司 監事（2名）：岩部良子・山本正司

事務局（1名）：澤木寿子

欠席役員 理事（7名）：大橋聖和・北村有迅・清川昌一・下岡和也・高野 修・道林克禎・辻森 樹

・成立要件：理事総数50名の過半数25名 本日の出席者43名で本理事会は成立。

・議決：出席者の過半数22名

・中澤前年度常務理事により開会。事務局より出席者数の確認を行った。

審議事項

1. 理事会議長・副議長の選出

中澤理事より、議長として芦寿一郎理事、副議長として小松原純子理事が推薦され承認された。

2. 会長＝代表理事、副会長の選出

候補者の所信表明及び会員による意向投票の結果を鑑みて、下記の会長及び副会長が選出された。

会長＝代表理事：岡田 誠、副会長：杉田律子、星 博幸

3. 執行理事の選出、部会長の選出

岡田会長より、新執行理事と所属事業部会の提案があった。審議の結果、原案通り選出された。

常務理事：中澤 努、副常務理事：緒方信一、運営財政部会：亀高正男*、加藤猛士、学術研究部会：辻森 樹*、尾上哲治、高嶋礼詩、山口飛鳥、広報部会：内尾優子*、松田達生、編集出版部会：狩野彰宏*、小宮 剛、社会貢献部会：坂口有人*、矢部 淳、内野隆之（*印は部会長）

この後、新理事会メンバーの紹介があった。

報告事項

1. 国際交流

前会長の磯崎理事より、2024年に韓国釜山で開催予定のIGCにおいて韓国側が計画している「竹島」巡検及び「日本海」呼称問題について、昨年9月より韓国側へ再考を強く要請していることが報告された。問題解決のため話し合いの場を持つことを韓国側へ提案してきたが韓国側の反応は鈍く、十分な話し合いができなかったため、3月のIUGS定例会合において日本側（日本学術会議地球科学部門代表委員）から本件について懸念が表明された。その後、日韓関係者の会合が2回開催されたが解決には至らず、6月中に改めて会合が予定されている。本件は、昨年秋より開催援助の窓口となっていた日本地質学会が単独で対応していたが、問題の重要性を考慮して、5月以降は国内の他学会および関係機関と連携し対応していることが報告された。

2. 行事（早稲田大会）

前行事委員長の星副会長より早稲田大会の準備状況について報告があった。

大会は早稲田大学14.15号館にて9月4-6日に対面で開催予定、ポスター発表はオンライン（e-poster）とし9/10,11、巡検は9/2,3及び9/7,8に開催予定であることが報告された。

また今回は参加費と発表料を分離し、院生・シニア会員の参加費を大幅に引き下げる予定であるので、周囲へ参加のお声かけにご協力いただきたいとのこと。なお新型コロナウィルスが6月末で状況に大きな変化がなければそのまま対面開催として準備をすすめる。7月以降も必要に応じて開催形態の再考を行う。

これに対し、最近では学生もオンラインでの発表に慣れてきており現地へ足を運ぶメリットを説明できるようにするとよい、対面の口頭発表とオンラインポスター発表の日程を切り離すと参加者が少なくなる可能性がある、ポスター発表については対面会場においてフラッシュトークを設けてはどうか、などの意見が出された。今後行事委員会を中心にさまざまな可能性を検討していくことになった。

監事報告

岩部監事より以下のコメントがあった。

早稲田大会の開催について活発な議論が行われ、たいへん良いことと思う。総会でも話題に挙がった代議員の人数構成等の問題については今後は非議論をしていただきたい。

以上、この議事録が正確であることを証するため、議長、副議長及び出席監事・理事は次に記名・捺印する。

2022年6月20日
一般社団法人日本地質学会
理事会議長：芦 寿一郎
理事会副議長：小松原純子
前任代表理事：磯崎行雄
代表理事：会長 岡田 誠
監事：岩部良子
監事：山本正司
理事：出席理事名（省略）

一般社団法人日本地質学会 2021年度第11回執行理事会議事録

日程：2022年4月9日（土）10:00～13:00

【WEB会議】

出席：磯崎行雄・佐々木和彦・平田大二・中澤 努・岡田 誠・ウォリス サイモン・大藤 茂・緒方信一・狩野彰宏・亀高正男・小宮 剛・坂口有人・高嶋礼詩・辻森 樹・星 博幸・松田達生・矢部 淳

欠席：なし

事務局 澤木

*定足数（過半数：9）に対し、17の出席

*前回議事録（21-10回）確認

報告事項

1. 全体的報告

・2022年度の科研費申請は120万円で採択さ

れた。

2. 運営財政部会（緒方・亀高）

1) 総務委員会

<共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>

・第13回（令和4年度）日本学術振興会育志賞候補者推薦依頼（学会締切：5/13）

・2022年度藤原セミナー募集開始時期延期の連絡：例年4～7月で募集をおこなっているが、コロナ感染状況を鑑みて募集開始時期を2022年は9月まで延期する。

・産業技術総合研究所地質調査総合センター令和4年度体制のご連絡（センター長：中尾信典氏ほか）

・一般社団法人資源・素材学会より新役員就任のご連絡（会長：朝日 弘氏ほか）

・地学団体研究会より声明「ロシアによるウクライナ侵攻に強く抗議する」（2022年3月22日付）の送付があった。

・令和4年科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞の受賞決定通知があった。日本地質学会推薦「防災減災から地域振興につながる地質情報の普及啓発」（斎藤 眞会員ほか3名）。

<会員>

1. 今月の入会者（9名）

正（院生割）会員（8名）：二村康平・竹林知大・谷元瞭太・夏目 樹・山川桃佳・松山和樹・新山桃乃・福井堂子

正（学部割）会員（1名）：佐藤瑠晟

2. 今月の退会者

2021年度末退会者：91名、除籍者：62名

3. 今月の逝去者（なし）

4. 2022年3月末会員数

賛助：27、名誉：38、正会員：3142〔正3021、院割113、学部割8〕合計3207（昨年比-77）

5. 2022年度50年会員顕彰者（44名）

池田保夫・石井久夫・伊藤谷生・井上正澄・今岡照喜・宇野泰光・大竹敏則・大橋俊夫・香川重善・狩野謙一・栗田光雄・小出和男・河野忠臣・小林武彦・小宮 学・紺谷吉弘・近藤直門・柴田秀道・白石和行・鈴木達郎・須藤 茂・傍島武師・田北 廣・津村善博・徳橋秀一・中屋志津男・成尾英仁・西田高久・西村 昭・西脇二一・長谷川四郎・林隆夫・原田憲一・東野外志男・平社定夫・牧本 博・松本 良・丸山茂徳・宮城晴耕・山崎晴雄・山崎安正・湯浅真人・吉田克史・吉田光廣

<会計>

・男女共同参画学協会連絡会第20期の分担金請求10,000円があった（地質学会オブザーバー学協会会員）。

<その他>

・クラウドシステムの状況：事務局で管理画面のテスト中。5月中旬に運用開始予定。

3. 広報部会（坂口・小宮）

1) 広報委員会（坂口）

特になし

4. 学術研究部会（辻森・ウォリス・星）

1) 行事委員会（星）

・2023年（近畿支部担当、会場：京都大学）大会の実行委員会メンバーを改めて確認した（委員長：山路 敦（京都大）、事務局長：佐藤活志（京都大）、・巡検委員長：三田村宗樹（大阪市大）、巡検案内書編集委員長：里口保文（琵琶博））。また2022年9月までに巡検コース案を決定していただく。その他の詳細についても近畿支部およびLOCと相談して準備を進める。

・2024年（東北支部担当）大会は、山形大学小白川キャンパスで実施する。実行委員会委員長：伴 雅雄（山形大）、事務局長：本 山 功（山形大）、巡検委員長：加々島慎一（山形大）、巡検案内書編集委員長：山崎 誠（秋田大）。

2) 専門部会連絡委員会（辻森）

・理事会報告の確認

3) 国際交流委員会（ウォリス）

・3月22日に2024 IGC37巡検の問題については韓国側と話し合ったが、進展はなかった。韓国側は日本での巡検は実施しないという可能性も示唆している。

・ロシア学長連合が、ロシア大統領支持声明を出したことを背景に、EGUではロシア機関経由の支払いを受け付けないことを決めた。すでに受け取った参加費はウクライナ援助のために寄付することとなった。JpGUでは、年大会へ参加する人はJpGU leadershipが出したウクライナに関する声明に賛同することを意味すると説明した上で、従来通り国籍や所属機関に関係なく参加を認める予定。

4) 地質標準化委員会（辻森）

特になし

5) 選挙管理委員会（中澤）

・理事会報告の確認

5. 編集出版部会（大藤・狩野）

1) 地質学雑誌編集委員会（大藤）

(1) 編集状況報告（2022年4月7日現在）

・2022年投稿論文：30〔内訳〕論説12（和文11、英1）、総説4（和文4）、ノート1（和文1）、レター5（和文4、英1）、フォト1（和文1）、巡検案内書7（昨年比+20）

査読中：42、受理済み：6

・128巻：公開済み4、入稿・校正中6、

2) アイランドアーク編集委員会（狩野）

・理事会報告の確認

3) 企画出版委員会（小宮）

特になし

6. 社会貢献部会（松田・矢部・高嶋）

1) 地学教育委員会（高嶋）

・理事会報告の確認

2) 地質技術者教育委員会（佐々木）

特になし

3) 生涯教育委員会（矢部）

・理事会報告の確認

4) 地震火山地質こどもサマースクール（松田）（←審議事項へ）

5) 地質の日（矢部）

・理事会報告の確認

7. その他執行理事会の下に設置される委員会

- 1) 利益相反マネジメント委員会（中澤）
特になし
8. 理事会の下に設置される委員会
 - 1) ジオパーク支援委員会（委員長天野：代理平田）
・理事会報告の確認
 - 2) 地学オリンピック支援委員会（高嶋）
・理事会報告の確認
 - 3) 支部長連絡会議（平田）
特になし
 - 4) 地質災害委員会（松田）
特になし
 - 5) 名誉会員推薦委員会（佐々木）
・理事会報告の確認、候補者の推薦文は総会上程のためさらに整える。
 - 6) 各賞選考委員会（中澤）
・理事会審議事項の確認
 - 7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（委員長堀 利栄）
・理事会審議事項の確認
 - 8) 連携事業委員会（中澤）
特になし
9. 研究委員会
 - 1) 地質環境長期安定性研究委員会（委員長吉田英一）
特になし
 - 2) 南極地質研究委員会（委員長 小山内康人）
特になし

審議事項

1. 2022年度地震火山地質こどもサマースクール予算と学会負担金の追加支出について
ハイブリッド開催のための準備・下見などで予算超過が見込まれるため、3学会での等分の追加負担の要請があった。結果的に追加負担となることはやむを得ないが、宿泊（1泊）イベントとしては参加費の設定が安すぎる。運営体制・方法にも問題があるのではないが、サマースクール実行委員会へは参加費の見直しやスタッフ交通費の減額などさらなる経費削減の努力をお願いし、受益者負担を原則とした経営努力を求める。
2. 早稲田大会における執行理事会提案のシンポ2件については、詳細が詰め切れていないため、途中経過を理事会で報告し、継続審議とする。結果をメールで理事会へ報告し了解を頂くこととする。
3. 理事会議事、資料の確認を行った。

以上

2022年5月14日
一般社団法人日本地質学会
執行理事会
会長（代表理事）磯崎行雄
署名人 執行理事 中澤 努

一般社団法人日本地質学会 2021年度第12回執行理事会議事録

日程：2022年5月14日（土）13:00～17:30

【WEB会議】

出席：磯崎行雄・佐々木和彦・平田大二・中澤 努・岡田 誠・ウォリス サイモン・大藤 茂・緒方信一・亀高正男・小宮 剛・高嶋礼詩・辻森 樹・星博幸・松田達生、（監事）山本正司・岩部良子

欠席：狩野彰宏、坂口有人、矢部 淳

事務局 澤木

*定足数（過半数：9）に対し、14の出席

*前回議事録（21-11回）確認

報告事項

1. 全体的報告
 - ・学会活性化に関わる会費などの変更に基づく、定款および運営規則の変更内容を会員へ周知するため、「学会活性化に関わる会費などの変更についてのご提案（第2回）」を学会HPに掲載した。総会までの期間に会員への周知に努める。
 - ・JpGU方地質学セッション（地質学会共催）への参加外国人来日のため、地質学会が受け入れ責任者となって、ビザ取得等の申請手続きを行うこととなった。例年主催者であるJpGUが担っているが、コロナ禍での外国人受入れ業務量に対応しきれないため、今年は共催等関連学協会に対応してほしい旨、世話人から依頼があった。実質の手続きは世話人を中心に進める。
2. 運営財政部会（緒方・亀高）
 - 1) 総務委員会
 - <共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>
 - ・北海道立総合研究機構 産業技術環境研究本部 エネルギー・環境・地質研究所より新所長就任のご連絡があった。（所長：大津 直氏）
 - ・石灰石鉱業協会より、令和4年度新役員就任のご連絡があった。（新会長：小山 誠氏）
 - ・山田科学振興財団2025年度開催国際学術集会開催援助申請募集の案内（申請期間：22/4/1-23/2/28）
 - ・第11,12回惑星地球フォトコンテスト入賞作品展（蒲都市生命の海科学館・日本地質学会共催；22/1/21-4/10）の事業実施報告があった。入場者5516名。
 - ・青少年のための科学の祭典2022（22/6/11-23/3/26；全国49会場）より後援名義使用の依頼があり、承認した。
 - ・第65回粘土科学討論会（22/9/7-8；島根大学）より協力依頼があり、後援を承諾した。
 - ・三浦半島活断層調査会（代表：茅野教幸氏）より地質の日記念行事「深海から生まれた城ヶ島」観察会（22/6/12）への後援

依頼があり、承諾した。

- ・朝日新聞社より「JSEC2022（第20回）高校生・高専生科学技術チャレンジ」（募集期間：22/9/2-10/4）に関する後援名義使用の依頼があり、承諾した。
- ・第11回ヒマラヤ実習プロジェクト（2023年3月実施予定）より、事業に対する推薦の依頼があったが、コロナ禍での公衆衛生の状況、海外渡航等は未だ予測が難しい状況であるため、今回は推薦しないこととした。
- ・日本地球惑星科学連合 第26回学協会長会議（5/30、zoom開催）の開催案内があった。磯崎会長出席予定。

<会員>

1. 今月の入会者（10名）
正会員（1名）：小椋隆馬
正会員（院生割）（8名）：平井智望、高見澤駿、上村真優子、成田佳南、谷脇由華、吉岡郎、竹山翔悟、高山 隼
正会員（学部割）（1名）：多久和 隼
2. 今月の退会者（2名）
正会員：友岡洋介、篠原良彰
3. 今月の逝去者（1名）
正会員：小宮 学（逝去日：2022年4月29日）
4. 2022年4月末会員数
賛助：27、名誉：38、正会員：3158〔正：3098、院割：57、学部割：3〕 合計：3223（昨年比-72）

<会計>

・

<その他>

- ・クラウド会員システムについては、5月末に会員向け公開を目指し実装試験中。
- 3. 広報部会（坂口・小宮）
 - 1) 広報委員会（坂口、代理小宮）
・フォトコンテスト入選作品展示会（5/3-5/15；上野公園）を開催中。
 - ・ジオルジュ 2022前期号が刊行された
 - ・ニュース誌投稿原稿への委員会対応に対して異議申し立てがあった（→審議事項へ）
- 4. 学術研究部会（辻森・ウォリス・星）
 - 1) 行事委員会（星）
・2023年学術大会（京都大：近畿支部担当）の会場予約、巡検コース検討などの準備が進行中。巡検の他にワークショップも1~2件行う予定。会場使用料がやや高額になる見込み。
 - ・「地質学露頭紹介 at JpGU2022」（5/29オンライン開催）の発表申込を5/16（月）まで延長した。
 - 2) 専門部会連絡委員会（辻森）
特になし
 - 3) 国際交流委員会（ウォリス）
・IGC巡検についての韓国とのミーティング（第3回）を実施。First circular が出る前の6月中に結論を出す方向で継続審議。
 - 4) 地質標準化委員会（辻森）
特になし
 - 5) 選挙管理委員会（中澤）
特になし

5. 編集出版部会（大藤・狩野）

1) 地質学雑誌編集委員会（大藤）

(1) 編集状況報告（2022年5月11日現在）

・2022年投稿論文：43〔内訳〕論説20（和文19，英1），総説5（和文5），ノート4（和文4），レター4（和文3，英1），報告1（和文1），フォト1（和文1），巡検案内書8（昨年比+27）

査読中：42，受理済み：6

・128巻：公開済み6，入稿・校正中5

2) アイランドアーク編集委員会（狩野，代理辻森）

・引き続き原稿投稿を呼びかけている。また日本人査読者の査読拒否のケースが目立つので，ぜひご協力をいただきたい。

3) 企画出版委員会（小宮）

特になし

6. 社会貢献部会（松田・矢部・高嶋）

1) 地学教育委員会（高嶋）

特になし

2) 地質技術者教育委員会（佐々木）

・早稲田大会における業界研究サポートサービスは，学生・院生は学術大会参加者でなくとも，参加可能とする。その際，学術大会参加者ではないことが明確に分かるよう名札などで区別する。

・高校生へのJABEE普及ポスター：今年度も作成・配布予定。7月初旬発送を目指す。

・地質系卒業・修了生の就職動向調査：調査結果現在集計中。

・キャリアビジョン誌2022：年度末刊行予定で準備を進める。

・第3回JABEEオンラインシンポジウム：開催報告記事をニュース誌5月号に掲載予定。

・地球・資源分野JABEE委員会：4月に新体制が発足した。本委員会メンバーの金川，坂口，竹内，細矢，亀高，佐々木が出席。

3) 生涯教育委員会（矢部）

・地質学会ニュースに「博物館で地学を学ぼう！」の連載を継続している。5月号は横須賀市自然・人文博物館の柴田健一郎学芸員に寄稿いただいた。

4) 地震火山地質こどもサマースクール（松田）

・今年度開催予定の浅間大会の下見経費35,894円について，地質学会としてはすぐに支払うことはできないと回答した。サマースクールの実施後（収支確定時）に赤字となった際には補填を検討することもやぶさかではない。また今後のスクール運営体制の見直し，改革を運営委員会に働きかけていく。

5) 地質の日（矢部）

・地質の日事業推進委員会（委員長：平田副会長）のポータルサイトで30件を超えるイベント（デジタルコンテンツは80件超）の広報が行われた。

・オンライン一般講演会を5/8（日）に実施した。ライブ配信中の最大視聴数は148で，5/9現在で総視聴数617回。講演後，演者からは聴衆の顔が見えるような形（ハイブリ

ッド）のほうがやりやすいという意見があった。

・5/14（日）に日本応用地質学会との共催で『街中ジオ散歩ミニin Tokyo「国分寺屋線」』を実施すべく4/8-15に募集を行い，15名の応募があった（募集人数15名。うち会員2名）。

7. その他執行理事会の下に設置される委員会

1) 利益相反マネージメント委員会（中澤）

特になし

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会（委員長天野：代理平田）

特になし

2) 地学オリンピック支援委員会（高嶋）

特になし

3) 支部長連絡会議（平田）

特になし

4) 地質災害委員会（松田）

特になし

5) 名誉会員推薦委員会（佐々木）

・総会用資料（候補者推薦文）確認行った。誤字等最終修正の上総会にはかる。

6) 各賞選考委員会（中澤）

特になし

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（委員長堀 利栄）

・学術大会でのEDSECSロゴ付与について，急ぎ会員への周知を進める。

8) 連携事業委員会（中澤）

特になし

9. 研究委員会

1) 南極地質研究委員会（委員長 小山内康人）

特になし

審議事項

1. 早稲田大会関連（星）

・早稲田大会執行理事会提案シンポジウムについては，「人新世における地質学：年代境界・物質境界研究のフロンティア」（世話人：川幡穂高・磯崎行雄）を承認し，LOC提案シンボとも一般公開・対面実施することとした。

・新型コロナウイルス感染症のため大会参加キャンセルを申し出た者への対応を検討した。

① 対象となるのは，新型コロナウイルス感染症の陽性者または濃厚接触者，検査待機中の方。それ以外の理由によるキャンセルについては，学会キャンセルポリシー及び規定の取消料に従って対応する。

② 対象者から連絡があった場合，演題登録の有無等により一部返金を行う。返金した場合は，オンライン発表（e-poster）へのアクセス権もなくなる。対応の内容は大会HPに明記し，参加者へ周知する。

③ 陽性反応や濃厚接触者になったと連絡があった場合は，そのことを示す証拠（メールや電話があった事実などでOK）の提示を連絡者に求める。

・大会キャッチフレーズの提案について

① 2023年大会から，大会キャッチフレーズは必要に応じて学会本部が提案することとする。

② 大会LOCには，市民講演会などの宣伝用フレーズを必要に応じて提案してもらう。

2. ニュース誌投稿記事への対応について

・ニュース誌投稿記事に対して，広報委員会が一部内容が不適切と判断し，著者へ修正を要請したが，不服として異議申し立てがあった。原稿と申立て内容を執行理事会で確認した。今後の対応については継続審議とする。

監事コメント

・（山本監事）ニュース誌投稿原稿に関する異議申し立てについては，会員の権利を損なわないよう，手続き上問題のないように検討・対応を進めていただきたい。

・（岩部監事）他団体（特に任意団体）からの後援等協力要請への対応については，学会としての明確な基準を設ける方が良い。

以上

2022年5月27日

一般社団法人日本地質学会

執行理事会

会長（代表理事）磯崎行雄

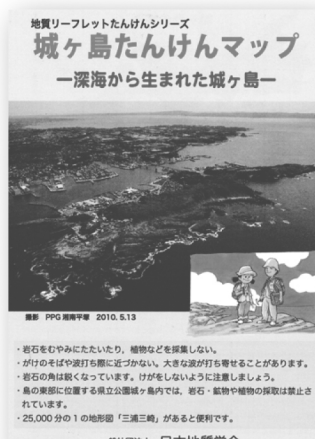
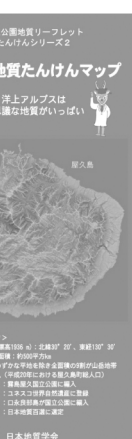
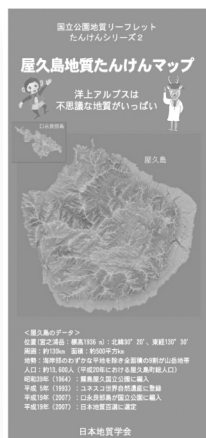
署名人 執行理事 中澤 努



発行：一般社団法人日本地質学会

国立公園リーフレット

たんけんシリーズ



シリーズ1～5:好評発売中

- ①箱根火山たんけんマップ—今、生きている火山
- ②屋久島地質たんけんマップ—洋上アルプスは不思議な地質がいっぱい
- ③城ヶ島たんけんマップ—深海から生まれた城ヶ島
- ④富士山青木ヶ原溶岩のたんけん—樹海にかくされた溶岩の不思議
- ⑤長瀬たんけんマップ—荒川が刻んだ地球の窓をのぞいてみよう

A2版両面フルカラー印刷。
ハンディタイプで野外での観察に最適です。
教材としてもぜひご活用下さい。

定価 **400円**(会員頒価 300円)
※20部以上ご注文の場合は割引あり

購入希望の方は、学会事務局まで。 e-mail : main@geosociety.jp 電話 : 03-5823-1150

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

